

ごん吉くんレポート

～南吉よもやま話～

第34回

『赤い鳥』で出会った人々① 鈴木三重吉

今年は、南吉が「ごん狐」や数々の童謡を発表した児童雑誌『赤い鳥』が創刊されて百年になります。

『赤い鳥』は、大正7年に鈴木三重吉によって創刊されました。三重吉は夏目漱石門下の小説家でしたが、当時の子どもの本が教訓染みたお伽噺や子どもに媚びた商業主義的な読み物に溢れていることを嘆き、出版社を介さず、自ら編集発行する形で『赤い鳥』を始めました。

巻頭に掲げた標榜語には、「世俗的な下卑た子供の読みものを排除して、子供の純性を保全開発する」と謳われました。そこには、大正デモクラシーの中、明治期の画一的な教育ではなく、自由で子ども中心の教育を目指した時代背景があります。

三重吉は、そうした目的に叶う芸術性、文学性のある子どもの読み物を「童話」と呼びました。

明治以前は昔話と同義語だった童話に、近代的な意味を

吹き込んだのです。

しかし、当時は三重吉が認めるような童話作家は、ほとんどいませんでした。そこで彼は、自身の人脈を活かして、文壇作家に童話を書くように勧めました。これに応えた作家には、芥川龍之介、島崎藤村、菊池寛、有島武郎、佐藤春夫など、錚々たる名前が並びます。

三重吉は、こうした寄稿者たちの作品に、容赦なく手を入れました。優れた小説家である彼らも、子どものための創作には慣れていたからで

です。昭和7年1月号に入選掲載された南吉の「ごん狐」にも、三重吉の手が入っていると考えられます。南吉自身の控えと見られる、通称「スパルタノート」の「権狐」と比べると、「うれしくなりました」とごんの気持ちを書いていたラストが、「うなづきました」と動作の描写になるなど、多くの箇所書き換えられています。

しかし、三重吉は、物語の基本的な構成や重要な要素には、一切手をつけていません。良いところは生かし、さらに磨きをかけるという態度で手を入れていきます。これを見て南吉は発奮し、さらに良い作品を書こうと努力したでしょう。『赤い鳥』への入選を経て、南吉は一段と創作の力を付けていくのです。

* * *

新美南吉記念館では、7月14日から10月28日まで、特別展「『赤い鳥』がくれたもの」新美南吉・夢と出会い」を開催します。



鈴木三重吉(昭3頃)
鈴木潤吉氏提供



『赤い鳥』創刊号
(大正7年7月)

アンケート

- Q1 今号でよかった内容や写真があれば教えてください。
- Q2 今号を読んだきっかけに行動したこと、または、したいことはありましたか。
- Q3 取り上げてほしい内容や企画、広報に関するご意見・ご感想などありましたらお聞かせください。

回答方法

住所、氏名、年齢、アンケートを書いて、ご送付ください。

あて先

〒475-8666
東洋町2-1 企画課
Eメール
kouhou@city.handa.lg.jp



さて、表紙はどんなアガミの様子です（P13参照）。夏の暑さをものともせず、どろんこになりながら元気に走り回る子どもたちの笑顔を見ていると、夏バテも吹き飛びますね。（浅野）

編集後記

みなさん、夏バテにはなっていないですか？最近暑さが続いているので、体がだるくなったり食欲がなくなってきた場合は注意が必要です。こまめな水分補給、適度な運動、十分な睡眠、ご飯をしつかり食べることが大切ですよ。

UD FONT
易やすいユニバーサルデザイン
フォントを採用しています。

VEGETABLE
OIL INK

印刷 東海通信印刷株式会社
植物油墨・再生紙使用